

〈調査報告〉

カムイの散文説話－白キツネ兄弟の物語－

大谷 洋一

- 目次 1. まえがき
2. アイヌ語テキストと対訳
3. 日本語テキスト

1. まえがき

本稿で紹介するテキストは、沙流郡平取町ペナコリ出身の上田トシ氏（1912～2005年）が伝承していたアイヌ語で「ウエペケレ」と呼ばれる散文説話である。本編の主人公はカムイ（神）である白キツネ¹兄弟の弟であり、その弟が自叙する形式で語り進めている。これは従来の研究上のジャンル区分に従えば、散文説話の中の一つのジャンルである「カムイの散文説話（カムイ ウエペケレ）」に属する²。

筆者が本編を採録した経緯は以下のとおりであり、この音声資料は北海道立アイヌ民族文化研究センターの閲覧コーナーのほか、「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」においてインターネットで公開している³。

- ① 1996（平成8）年5月11日、千歳市蘭越の中本ムツ子氏（元・千歳アイヌ文化伝承保存会会長）の自宅において、上田トシ氏から本編のアイヌ語の語り（10分12秒）とその日本語訳を採録した。（採録資料CC0000342／公開資料CC800007「平取町の伝承2」）
- ② 2000（平成12）年1月30日、平取町旭において、上田トシ氏から本編のアイヌ語による再話（12分32秒）を採録した。（採録資料CC000977／平成27年度公開予定）

カムイの散文説話の中で本編と同じ主人公が登場する類話は、筆者のデータによれば日高地方の沙流川筋のみに伝承されているが、他の地域では伝承されていない。これらは既に、田村すず子⁴と楠本克子⁵がアイヌ語原文の対訳テキストとして既に発表している⁶。両者はほぼ同じ内容で語

¹ 知里真志保『知里真志保著作集 別巻1 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社（1976）では、ウパシチロンヌッ upascironnup を「エゾイタチ」と記している。しかし、上田氏は日本語テキストでは「キツネ」と訳しており、ウパシ upas（雪）は白いので「白いキツネ」と認識して語っていることが筆者との対話で判明しているため、本編の表題及び対訳においては「白キツネ」と記述する。

² 上田氏や近隣のアイヌ語の語り手に対して「カムイ ウエペケレ」という呼称を確認することを筆者は失念していた。上田氏は本編をただ「ウエペケレ」と呼称していた。

³ 2015年4月に北海道立アイヌ民族文化研究センターと北海道開拓記念館が統合して「北海道博物館」となるので録音資料は引き続きここで公開する。

⁴ 田村すず子「雪狐の兄弟の話」『アイヌ語音声資料2』早稲田大学語学教育研究所（1985）、p.p.58-65。

⁵ 『itahcara』創刊号編集事務局（所収：楠本克子「資料報告 上田とし氏のウエペケレ～ウパシチロンヌッの兄弟の話」）『itahcara（イタハチャラ）』第3号、『itahcara』創刊号編集事務局（2004）、p.p.33-50。

られているが、本編とは登場人物やストーリーの展開に大きな違いが見られるので、本編を比較資料の素材として報告する。

上記の3編の大まかなあらすじは、「白キツネ兄弟の兄が人間の娘を好きになり人間の男に化けて娘のところに行くが、弟は先回りして犬に化けて兄を追い払ったりして兄の行為の邪魔をする。自宅に帰った兄に弟が「カムイはカムイと結婚し、アイヌはアイヌ同士で結婚するものだ。このことが他の神々に知られたら罰せられるのだぞ。」と叱咤すると、過ちを悟った兄は自分の行いを反省して弟に謝る」という異類婚の禁止というテーマを語っているが、田村及び楠本の採録した物語は筆者の採録した物語に較べて人間とカムイの接触する機会が多く、そのやりとりがより詳しく語られている。

そこで、物語の内容が一致する田村と楠本のテキストをA、本テキストをBに分け、それぞれ対応するモチーフごとにA Bを見比べることで違いを示したい。

主人公のアイヌ語名は全て「upascironnup ウパッチロンヌッ」であるが、田村は「雪狐」、楠本はアイヌ語名称のままかあるいは物語中で「cironnup キツネ」、大谷は「白キツネ」などと訳しており、煩雑であるためここではアイヌ語名称の「ウパッチロンヌッ」と表記する。

	A		B
語り手	鳩沢ふじの	上田 トシ	上田 トシ
採録者	田村すず子	楠本 克子	大谷 洋一
1	ウパッチロンヌッの兄弟が暮らしていた。		ウパッチロンヌッの兄弟が暮らしていた。
2	下流の村の村長の一人娘にウパッチロンヌッの兄が恋をした。		下流に住む人間の姉妹の姉にウパッチロンヌッの兄が恋をした。
3	兄が人間に化けて娘のところへ出かけたので、弟が先回りして「大きな雄犬」に化けて娘とじゃれた。		兄が人間に化けて娘のところに出かけたので、弟が先回りして「小犬」に化けて姉妹とじゃれた後、一緒に姉妹の家に行った。
4	兄は娘に近づいたが大きな雄犬が間に入った。兄が雄犬の素性を探ったがわからずに怒って家に帰ると、弟は兄に先回りして自宅にいた。		兄は姉妹の家を訪問して土産物をあげた。夜になって兄が姉に夜這いすると小犬が兄の尻を噛んだ。兄は逃げ帰ると、弟は兄に先回りして自宅にいた。
5	ある日、兄が外出したので、弟が自宅で透視して見ると、兄が娘の魂を抜き取って帰宅しようとするのが見えた。弟は人間に化けて兄のところへ行き、娘の魂を奪い返した。		ある日、兄が外出したので、弟は先回りして、フキの葉で姉妹の人形と家を作った。その家に兄が入ったので弟は家に火を放った。兄は驚いて自宅に逃げ帰り、腹を立ててふて寝した。
6	弟は娘の魂を持って村長の家を訪問し、死		弟は木弊のとがった部分を兄に突き刺しな

⁶ 上田トシ氏の姉である木村キミ氏が本編とほぼ同じ内容で語ったものを萱野茂が1965年に採録し、「恋路のじゃま」と題して『カムイユカッと昔話』小学館(1988)、p.p.232-237に日本語訳のみを掲載している。萱野はその解説の中で「赤いキツネは、単にチロンヌッ(キツネ)ですが、黒いとクンネチロンヌッ、白いとウパッチロンヌッといます。」と述べている。

⁷ 筆者の研究では、「人間の散文説話」においてカムイが人間の姿に化けて人間世界を訪問するストーリーはなく、カムイが人間の姿で現れるのは夢見の中だけである。

	んだ娘の喉元に魂の玉をこすりつけて生き返らせた。村長が弟に感謝して宝物を譲ろうとするが、弟はそれを断り「根本の尖った木弊」を所望し ⁸ 、それをもらって帰宅した。	がら「人間に悪さをしたから、神々から兄弟共々が罰せられて悪神にされることになるのだぞ。」と言いながら叱咤した。
7	弟は木弊のとがった部分を兄に突き刺しながら「人間に悪さをしたから、神々から兄弟共々が罰せられて悪神にされることになるのだぞ。」と言いながら叱咤した。	兄はふて寝しながら邪魔をした者の素性を探っていたが、やせ細って死にそうな有様になった。弟は兄に「人間は人間と、神は神と恋をするものなのだ。このことが他の神々に知られたら、我々は地獄に落とされるのだぞ。」と叱咤した。
8	兄が反省して弟に謝った。	兄が反省して弟に謝った。
9	「夢見」によって弟は村長に対して「私はウパッチロンヌツの兄弟である。兄が娘を殺したので、弟の私が娘を生き返らせたのだ。」と知らせた。	
10	「祈り」によって村長は弟に対して、感謝しながら木弊、ご馳走、酒などを弟に送った。	
11	弟は他のカムイを招いて宴会を催した。ウパッチロンヌツは、カムイたちに褒め称えられ、人間たちにもその名が知られて人間に祭られるようになったのであると、弟が語った。	

A B共に項目8において、ウパッチロンヌツの兄が反省して弟に謝罪する場面は同じように語られているが、登場人物や具体的な事件の展開の仕方が異なり、Bは項目8で物語を短く語り終えている。そこまでの経過で最も異なる点は、Aは村長の娘がウパッチロンヌツの兄に殺されてしまうがその弟が娘を生き返らせる場面があり、Bはウパッチロンヌツが人間に対してほとんど被害を与えていないということである。つまり、Bには人間から感謝されるためのモチーフが含まれていないために、単純に兄弟間のもめ事の一件として語られているだけである。

一方、Aの方はウパッチロンヌツの兄が人間を殺してしまうという深刻な事件を引き起こしているため、カムイと人間の関係性にまで踏み込んで語る必要が生じていると考えられる。それが、項目9のカムイから人間への「夢見」、項目10のそれに対する人間からカムイへの返答としての「祈り」があり、項目11にその結果としてウパッチロンヌツが名高いカムイとして祭られるようになったのであるという由来として語られている。これは一般的な「人間の散文説話」と同様の語りおさめのパターンである。

なお、先行研究では「カムイの散文説話」について、知里真志保が「昔話のうち、神が自分のこ

⁸ カムイは木弊を製作することが出来ないといわれていることと符合する場面である。

とを自ら述べる體になっているものを云う。神謡や聖傳から折返しの文句を取り去って多少散文的に語れば、そのままこの「神々の散文説話」になる。それらから散文的に發達したものと思われる」と述べている⁹。その後も久保寺逸彦¹⁰、萩中美枝¹¹、田村すゞ子¹²らによって同様のことが述べ続けられてきた。

先行研究の説が確かなものであれば、あらゆる「カムイの散文説話」の基になった「神謡」が存在することになるが、筆者が収集したデータによれば、上に記したA Bの散文説話に該当する神謡は存在しない¹³。筆者の今後の課題は、「カムイの散文説話」と「神謡」の二つのジャンルを比較対照するためのデータを蓄積することである。そのようなことから、本編は口承文芸のジャンル問題を考察する上で重要な資料といえる。

本稿の作成にあたって、モニターとなっていたいただいた方々から多くの過ちの指摘を受けて修正することができました。単純な誤記については省かせてもらいますが、重要な点についてはその点を注記しました。

記して心から感謝申し上げます。

〈凡例〉

(1) 本文の構成

二段組として、左側にアイヌ語による語りの部分、右側にその日本語訳を記し、注記は各ページの下に記した。

(2) カタカナの表記

基本的に北海道ウタリ協会発行の『アコロ イタッ』の表記の仕方と同じである。ただし音節末の r はそのときどきで、ラ、リ、ル、レ、ロ、に近い音が出たり、母音が付いたりする場合があるので、それが比較的に目立つ場合はその近い音を記した。また、言いさしや特に意味をなさない言いよどみは（ ）で括った。

音素交替によって変化した音はそのとおりに記した。例：「ポン セタ」→「ポイ セタ」。

(3) ローマ字の表記

これも基本的に『アコロ イタッ』と同様に記した。日本語の場合は全て大文字で記した。音素交替を起こしたところは、単独で発した場合の形で記した。例：「poyseta」→「pon seta」。

よく聞き取れない音や意味の解釈が不確かな語句については、そのローマ字の語尾に「??」を付けた。

(4) あらすじと対訳の〔 〕内表記

日本語の意味として読解しにくい箇所は、註あるいは〔 〕内にことばを補った。

⁹ 知里真志保『アイヌ文学』元々社 (1955)。p168。

¹⁰ 久保寺逸彦「文学 (「アイヌ」の項目)」、フランク・B／ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典1』ティビーエス・ブリタニカ (1972)。P.69。／久保寺逸彦『アイヌの文学』岩波書店 (1977)。pp.185-186。

¹¹ 萩中美枝『北の教養選書1 アイヌの文学ユーカラへの招待』北海道出版企画センター (1980)。p.131。

¹² 田村すゞ子「アイヌ語」『言語学大事典 第1巻 世界言語編 (上)』三省堂 (1988)。p.91。

¹³ 散文説話化した物語は採録されているが、基になった神謡が採録されていなかったということも考えられるが、現時点での筆者のデータによれば、全ての「カムイの散文説話」が「神謡」から変化したと断定できる結果は得られない。管見では、カムイが一貫して自らの体験を自叙する散文説話はアイヌ語原文で公刊された物語27編しか存在しない。

2. アイヌ語テキストと対訳

(アユ) アユピ° アン ヒネ	
a=yupi an hine ¹⁴	私の兄がいて
トゥン アネ ヒネ オカアン ワ	
tun a=ne hine oka=an wa	私たちは二人で暮らして
ネッ アエシリキラッ カ ソモキノ	
nep a=esirkirap ka somo ki no	なんの不自由もなく
アユピ° トゥラノ オカアン ペ ネ オラ	
a=yupi turano oka=an pe ne ora	兄と一緒に暮らしていたが
イパナケ タ カ	
i=panake ta ka	私たちの川下にも
ウトゥレシコロ ¹⁵ ポン メノコ ウタラ	
utureskor pon menoko utar	姉妹の若い娘たちが
トゥン オカ シリ アヌカラ コロ	
tun oka siri a=nukar kor	二人で暮らしている様子を見ながら
アナン ペ ネ ア	
an=an pe ne a p	いたのであったが
アユピ ウサ チコイキッ ライケ ワ	
a=yupi usa cikoykip rayke wa	私の兄がいろいろな獲物を殺して
(ネブ) ネッ カ (アコン) アエ ルスイ カ	
nep ka a=e rusuy ka	私は何を食べたいとも
アコン ルスイ カ ソモキノ	
a=kon rusuy ka somo ki no	何を欲しいとも思わずに
アナン ペ ネ ア コロカ	
an=an pe ne a korka	暮らしていたのけれども
アユピ エネ ヤイヌ ヒ	
a=yupi ene yaynu hi	兄はこのように思っていた。
(アサハ、アサでない…)	
(a=saha, a=sa DENAI…) ¹⁶	[言い損ない]
イサネ ポン メノコ コヤイカッカラ ワ	
isane pon menoko koyaykatkar ¹⁷ wa	姉の方の娘に片思いをして

¹⁴ 約3年半後に語った再話では、「ウパッチロンヌッ イリワッ アネ ヒネ upascironnup irwak a=ne hine (白キツネの兄弟が私であって)」と語り初めから物語中での自叙者であるカムイの名を明かしている。それは上田氏が後年になって身につけた散文説話の語り方の特徴である。

¹⁵ 原稿では「ウトゥレシ コロ utures kor」としていたがモニターから過ちを指摘され「ウトゥレシコロ utureskor」に修正した。「ホクコロ hokukor ((女が)結婚する)」と同様の自動詞である。

¹⁶ 言い損ないと判断し対訳しない。

¹⁷ 上田氏によれば、「コヤイカッカラ koyaykatkar」は「片思いのこと」であり、「久保寺」(1992)は「chiyay katkare ものに魅入られる」と記述。p.51。

(アウ) アラパ クナク ラム コロ アン シリ	
arpa kunak ramu kor an siri	行こうと思っている様子を
アヌカラ コロ アナン ペ ネ アッ	
a=nukar kor an=an pe ne a p	私は見ていたのであったが
シネ アン タ アラパ クニ	
sine an ta arpa kuni	ある日、彼が出かけるつもりで
(エヤイ、エヤイ、コ) ヤイエトコイキ ワ	
yayetokoyki wa	身じたくをして
(ア)ウサ サッカム ネヤ サッチェッ ネヤ	
usa sat kam ne ya sat cep ne ya	いろいろな干し肉だとか干し魚だとか
ネ ポン メノコ ウタラ カシオセッ カラ ヒネ	
ne pon menoko utar kasi ose p kar hine	その娘たちのお土産に持って
サン エトコ オイキ コロ アン シリ	
san etoko oyki kor an siri	下りる準備をしている様子を
アヌカラ ヒ クス オラ (エトウク)	
a=nukar hi kusu ora	見たので、それから
エトコ アトウシマク ワ(ア)	
etoko a=tusmak wa	私は彼の先回りをして
ホシキ ホシキ サナン ルウェ ネ アクス	
hoski hoski ¹⁸ san=an ruwe ne akusu	先に先に下りて行くと
ネ ポン メノコ ウタラ トウンネ ヒネ	
ne pon menoko utar tun ne hine	その娘達が二人で
ニナ コロ オカ ヒネ	
nina kor oka hine	薪を採っていて
オロ タ サナン クス	
oro ta san=an kusu	そこに私は下りたので
(ボン) ¹⁹ ポン セタ ネ ヤイカラアン ヒネ	
pon seta ne yaykar=an ²⁰ hine	私は小犬に化けて
アラパアン ヒネ ネ ポン メノコ ウタラ	
arpa=an hine ne pon menoko utar	行って、その娘達が
ニナ コロ オカ ウシケ タ	
nina kor oka uske ta	薪採りをしている所に

¹⁸ 上田氏によれば、ここは言い損なったのではなく「ホシキ hoski (先に)」を二度繰り返して、弟がとても急いでいることを表現しているということである。

¹⁹ ここは「ボンボン ponpon (とても小さな)」ではなく、ボン pon「小さい」の一語であると筆者が判断した。あまりに小さいと、飛び跳ねて娘にじゃれたり、人間に化けた兄に噛みつくことは出来ないであろうと想像されるからである。また、再話 (CC000977) では「ポイセタ poyseta」と発音していることによる。田村すず子のテキストでは「pinne seta 雄犬」あるいは「poro seta 大きな犬」、楠本克子のテキストでは「poro pinne seta 大きな雄犬」と記述。

²⁰ 上田氏によれば、イヌの声を真似ることを「セタ ハウ ネ ヤイカラアン seta haw ne yaykar=an」という。

サマ タ ア _ラ パアン ヒネ (エ)	
sama ta arpa=an hine	そばに行って
ルウェ ネ アクス	
ruwe ne akusu	みると
エア _ラ キンネ ネ ポン メノコ ウタ _ラ	
earkinne ne pon menoko utar	とても、その娘たちが
イエヤイコブンテ _ッ ワ(ワ) イヨマ _テ コロ	
i=eyaykopuntek wa i=omap kor	私に喜んで可愛がると
サマ タ ネン ネン ヤイカ _ラ ヤイカ _ラ アン	
sama ta nen nen yaykaryaykar=an ²¹	そばでいろいろと私じゃれて
コロ アナン ア _テ	
kor an=an a p	いたのであったが
ニナ オケレ _パ ヒネ ニシ _ケ カ _ラ パ ヒネ	
nina okerpa hine niske karpa hine	薪取りが終わって薪を荷造りして
(ニ)ネ ニシ _ケ セ エヤ _ッ パ ヒ クス	
ne niske se eyappa ²² hi kusu	その薪の背負い荷が背中に乗ったので
ナニ ネ ポン ニシ _ケ カ ウン	
nani ne pon niske ka un	すぐその小さな薪の荷の上へ
テレケテ _ッ アン ヒネ ネ ニシ _ケ カ タ	
terketek=an ²³ hine ne niske ka ta	ひょいと跳ねて薪の荷の上に
アナン ルウェ ネ アクス ヒネ	
an=an ruwe ne akusu hine	私がいたところ
パイ _エ アン ヒネ	
paye=an hine	私たちが行って
ネ(エ) ポン メノコ ウタ _ラ ウニ タ	
ne pon menoko utar uni ta	その娘たちの家に
パイ _エ アン ヒ クス ナニ アフナン ヒネ	
paye=an hi kusu nani ahun=an hine	行ったのですぐに私は〔家に〕入って
アパ サム タ アパ ハ _ラ キソ ワ	
apa sam ta apa harkiso wa	戸口に、戸の左座で
シユコカ _ラ カリアン ワ アネ ヒネ	
siyukokarkari=an wa a=ne hine ²⁴	丸くなって

²¹ 上田氏によれば、小犬の姿だけでなく、声や飛び跳ねる動きなども小犬を真似てじゃれている様子である旨の説明があった。

²² 「エヤ_ッパ e-yap-pa (～に上がる)」の2項動詞と解釈して、ここでは「～に乗った」と訳した。e「～に」 yap「上がる」 pa「複数形形成接尾辞」と考える。

²³ 上田氏によれば、「ここはテレケアンテ_ッ terke=an tekの方が聞きやすかった。どっちでもいいけど」と言われたが、再話(CC000977)でも今回同様に発音している。

²⁴ 実際は「シユコカ_ラ、カ_ラカリ アネ ヒネ」のように聞こえるが、後で上田氏が本文のように訂正されたので、ここではそれを記した。

ホッケアン ヒネ	
hotke=an hine	横になって
アナン ペ ネ アクス (ア)	
an=an pe ne akusu	いると
トケシ ネ アユピ サン ヒネ オラ(ア)	
tokes ne a=yupi san hine ora	晩方になり私の兄が下りて
アフン ヒネ ネア ポン メノコ ウタラ	
ahun hine nea pon menoko utar	[家に] 入って、その娘たち
(エウン コ) コオンカミ エランカラッ ネヤ	
koonkami erankarap ne ya	に礼拝の挨拶などを
キ ヒネ オラ セ ワ サン	
ki hine ora se wa san	してから背負って来た
ウサ チェッ ネヤ カム ネヤ	
usa cep ne ya kam ne ya	魚やら肉やら
サンケ ワ ネ ポン メノコ ウタラ	
sanke wa ne pon menoko utar	出して、その娘たち
(コレパ) コレ ルウェ ネ アクス	
kore ruwe ne akusu	に彼が与えると
ネ ポン メノコ ウタラ カ	
ne pon menoko utar ka	その娘たちも
エヤイコプンテッパ コロ	
eyaykopuntekpa kor	それを喜んで
ナニ ピリカ スケ スパ ヒネ	
nani pirka suke supa hine	すぐに良い料理を作って
オラ ヤイカタ カ エパ ヒネ オラ	
ora yaykata ka epa hine ora	それから自分たちも食べてから
(アセ、イ) イヘコテ カ (あの、おお、あ)	
i=hekote ka	私の方へも
イタンキ オロ (オマ) オマレ ヒネ	
itanki or (oma) omare hine	お椀の中にそれを入れて
イサム タ アヌ ヒ クス	
i=sam ta anu hi kusu	私のそばに置いたので
ネ カム ネヤ チェッ ネヤ	
ne kam ne ya cep ne ya	肉だの魚だのを
オラ アエ ヒネ	
ora a=e hine ²⁵	私が食べて

²⁵ 上田氏によれば、主人公の気持ちとしては「与えられた食事は、余りものだったから、本当は食べたくなかったけれど、小犬に化けていることを疑われないように食べた。」とのこと。

ネ ポン メノコ ウタラ ネ ヤッカ イベ	
ne pon menoko utar ne yakka ipe	その娘たちも食事が
(オカアン) オカケ アン ルウェ ネ アクス	
okake an ruwe ne akusu	終わったので
タネ ホッケ ウシ アン アクス	
tane hotke usi an akusu	今、寝る時間になったところ
(ウ)ネ ポン メノコ...(イ)	
ne pon menoko...	その娘...
イサネ ポン メノコ カ ホッケ アクス	
isane pon menoko ka hotke akusu	姉娘も寝ると
ナニ ネア アユピ	
nani nea a=yupi	すぐ、その私の兄が
ネ ポン メノコ サマ タ	
ne pon menoko sama ta	その娘のそばに
アラパ ヒネ ホッケ ルウェ ネ ヒネ	
arpa hine hotke ruwe ne hine	行って横になって
インカラアン ヒネ アナクス	
inkar=an hine an akusu	見ていると
ホッケ ヒ トゥライラム	
hotke hi turayram ²⁶	横になるとすぐに
ネア ポン メノコ カシ エウンエウン	
nea pon menoko kasi eun eun	その娘の上でもどもどする
シリ イキヒ ヒ クス	
siri ikihi, hi kusu	様子がしたので
(アラパ ヒネ) アラパアン ヒネ	
arpa=an hine	私は行って
(ネ ポン メノコ、 ポン メノコ)	
(ne pon menoko, pon menoko) ²⁷	[言い損ない]
アユピヒ (オソロ) オソロ カミ	
a=yupihhi osoro kami	兄貴の尻の肉を
アクパクパ アクス	
a=kupakupa akusu	私がガブガブ噛むと
エキマテッ ヒネ	
ekimatek hine	彼はそれで驚いて

²⁶ 上田氏によれば、「トゥライラム turayram」は「すぐに」の意味である。田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』は「・・・すると同時に。」と記述。

²⁷ 「娘に近づいた兄を」と言うつもりであったかもしれないが、言い損ないと判断し対訳しない。

ナニ ソヨシマテッ ヒネ	
nani soyosma tek hine	すぐ、外に飛び出して
ホシピ ヒ クス ヤイカタ カ	
hosipi hi kusu yaykata ka	帰ったから自分も
ナニ (ソユ) ソイエネアン ヒネ	
nani soyene=an hine	すぐ、私は外に出て
エトコ アトゥシマク ワ アラパアン ヒネ	
etoko a=tusmak wa arpa=an hine	私は先回りして行って、
アウニ タ アラパアン ヒネ	
a=uni ta arpa=an hine	家に行って
アナン ペ ネ コロカ オラ	
an=an pe ne korka ora	いたのであるがそれから
イヨシ エッ ヒネ	
i=os ek hine	私の後に彼が来て
(トイ) トイコヘプトウトゥ カネ ヒネ	
toykohepututu kane hine	ひどくむくれて
テパ カ サクノ アフン ヒネ	
tapa ka sakno ahun hine	ふんどしもせずに入ってきて
ヘプトウトゥ ワ ナニ ホッケ ルウェ ネ	
hepututu wa nani hotke ruwe ne wa	むくれて、すぐ横になって
(ア、ワカイヒン…)	
(a, wakayhin??) ²⁸	[言い損ない]
「ヒンタ ²⁹ カムイ ヘ ウエン カムイ ヘ	
"hinta kamuy he wen kamuy he	「なんの神なのか？悪い神なのか？」
イアッカリ ヌプル ヒネ	
i=akkari nupur hine	私以上に霊力が強くて
ネ イランモッカ シリ アン」	
ne i=rammokka siri an''	私をからかっているのだろうか？」
セコロ ヤイヌ オラ ヒネ	
sekor yaynu ora hine	とと思って
オモトコロ フナラ クス コロ アン ヤッカ	
omotokor hunara kusu, kor an yakka	その素性を探っていても
エランペウテッ ペ ネ クス	
erampewtek pe ne kusu	わからなかったので

²⁸ 意味不明。言いよどんでから「ヒンタ」と言おうとしたのかもしれない。

²⁹ 疑問代名詞の「ヒンタ hinta (何)」を沙流川下流域では「ンタ hnta (何)」と言う。これらは「ヘマンタ hemanta (何)」の縮約形である。

オラノ ヘムイムイエ ワ ホッケ ワ
 orano hemuymuye wa hotke wa
 パテッ アン (アイ)³⁰ ヒケ カ
 patek an hike ka
 ネ オモトコロペ エランペウテッ ヒ オラ
 ne omotokorpe erampewtek hi ora
 エヤイラムカラ ヒ オラ スイ
 eyayramkar hi ora suy
 エキムネ コロ アン ペ ネ アッ
 ekimne kor an pe ne a p
 ランマ ネ ポン メノコ ウタラ エウン
 ramma ne pon menoko utar eun
 アッパ ルスイ コロ (アナン) アン ルウェ
 arpa rusuy kor an ruwe
 アヌカラ コロ アナン ア ワ
 a=nukar kor an=an a wa
 アエコヌコッネ コロ アナン
 a=ekonukosne kor an=an
 ルウェ ネ アッ ラポッケ オラ
 ruwe ne a p rapokke ora
 スイ サン エトコ オイキ ヒ クス
 suy san etoko oyki hi kusu
 エトコ スイ アエトウシマッ ヒネ
 etoko suy a=etusmak hine
 サナン ヒネ オラ (コロ、コナム)
 san=an hine ora
 コロハム アニ ポン チセ アカラ オラ
 korham ani pon cise a=kar ora
 ネ コナム アニ (イ)
 ne konam³¹ ani
 ネ ポン メノコ ウタラ
 ne pon menoko utar
 ネ カトゥ アカラ (トゥ)
 ne katu a=kar

それから、ふて寝して
 ばかりいたところが
 その素性がわからないのでそれから
 あきらめてから、再び
 山へ行って仕事をしていたのであったが
 相変わらず娘たちの所へ
 彼が行きたがっている様子を
 見ていて
 私は肝を焼きながらいた
 ものであったがそれから
 また下りて行く準備をしたので
 彼より前にまた私は先回りして
 下りてから
 フキの葉で小さな家を作って
 枯れ葉で
 あの娘たち
 の姿かたちを作った。

³⁰ モニターから「アイネayne」の言いよどみの可能性を指摘されているが不詳。

³¹ 上田氏によれば、コナム konam は「フキの枯れた葉」という旨の説明があった。田村(1996)には、「落ち葉、木の葉の落ちて木から離れてしまったもの。」と記述。上田氏は「木の葉」だけでなく、地上に生えて枯れた植物の葉も含めて表現していた。

トゥ ポン メノコ コロハム アニ
tu pon menoko kor ham ani
アカラ ヒネ ネ チセ オッタ
a=kar hine ne cise or ta
コナム チセ オッタ
konam cise or ta
アアヌ ヒネ オラ ヌイナクアン ヒネ
a=anu hine ora nuynak=an hine
アナン ルウェ ネ アッ
an=an ruwe ne a p
オロ タ スイ アユピ エキネ
oro ta suy a=yupi ek hine
アフン ノイネ イキ ラポッケ ヒネ
ahun noyne iki rapokke hine
コナム アペ アコトゥッカテク
konam ape a=kotukka tek
ルウェ ネ アクス コナム ネ クス
ruwe ne akusu konam ne kusu
パラパラセ ヒネ ウファイ ワ
parparse hine uhuy wa
イサム ルウェ ネ アクス
isam ruwe ne akusu
オロワノ ポ ヘネ (エ)
orowano po hene
イルッカ ヒネ ナニ ホシピ
iruska hine nani hosipi
ヤイカタ カ ナニ ホシピアン ヒネ
yaykata ka nani hosipi=an hine
アウニタ アナン ルウェ ネ アッ
a=uni ta an=an ruwe ne a p
オロ タ エク コロ ナニ ホッケ ワ
oro ta ek kor nani hotke wa
(オラノ) オロワノ ヘムイムイエ ワ
orowano hemuymuye wa
(ア)ホッケ ワ パテック アン アイネ
hotke wa patek an ayne
イネ ヘンパツ ト カ
ine hempak to ka

二人の娘をフキの葉で
作ってその家に
枯れ葉の家のところに
それを置いてから私は隠れて
いたのであったが
そこにまた私の兄が来て
〔家に〕入ろうとしたときに
枯れ葉にさっと火をつける
と、枯れ葉だったので
メラメラと燃えて
しまったところ
それからは、なおいっそう
彼は怒ってすぐに帰った。
自分もすぐに帰って
私は自宅にいたのであったが
そこに彼が来て横になって
それから、ふて寝して
寝てばかりいたあげく
幾日も

イネ ヘンパク チュア カ
 ine hempak cup ka
 ホッケ ワ パテク アン ヒケ カ
 hotke wa patek an hike ka
 オモトコロ エランペウテク コロ アン ヒネ
 omotokor erampewtek kor an hine
 タネ (ア)ライ ノイネ ポネ タクテ ネ ワ
 tane ray noyne pone takup ne wa
 ライ ノイネ アン ヒクス オラ
 ray noyne an hi kusu ora
 ライ ネ カネ ライ ヘネ キ ヤクン
 ray ne kane ray hene ki yakun
 カムイ オルン ヤイエパタライエアン
 kamuy or un yayepataraye=an
 セコロ ヤイヌアン クス こんど
 sekor yaynu=an kusu KONDO
 シネ アン タ アコパシロタ
 sine an ta a=kopasrota
 アユピ アコパシロタ コロ
 a=yupi a=kopasrota kor
 「エネ パク アン ペ ウネノ
 "ene pak an pe uneno
 イッワク アネ ヒネ
 irwak a=ne hine
 エランペウテク³² ヒ ルウェ ヘ アン
 e=erampewtek hi ruwe he an
 (カム) ヒンタ エキ クス
 hinta e=ki kusu
 アイヌ アナクネ アイヌ オルン
 aynu anakne aynu or un
 イヨシッコテテ ネ カムイ アナクネ
 iosikkote p ne kamuy anakne
 カムイ オルン イヨシッコテテ ネ ヒケ
 kamuy or un iosikkotep ne hike
 アイヌ ポン メノコ エオシッコテ ワ
 aynu pon menoko e=osikkote wa

幾月も
 寝てばかりいても
 〔邪魔をした者の〕素性をわからずにいて
 今では死んだように骨ばかりになって
 死んだようになったので、それから
 死んだようになって亡くなりでもしたら
 〔他の〕神様に申し訳が立たない
 と思ったので、それから
 ある日、私は彼を叱りつけた。
 兄をののしりながら
 「これくらいのことと同じ
 兄弟でいて
 お前はわからないのか。
 お前は何をしたため……
 人間というのは人間に
 恋をして、神というのは
 神のところで恋をするものだが
 人間の娘にお前は恋をして

³² 「エランペウテク erampewtek」と聞こえるが、モニターから指摘を受けて再考し、文脈から判断してローマ字には人称接辞「エ e=(お前が)」を記した。

ネンカネ カムイ オッタ (タ)
 nenkane kamuy or ta
 アエオペンパッ ヤッ アナクネ
 a=eopenpak yak anakne
 アラ テイネモシリ ウン アエコオテルケ
 ar teyne mosirun a=e=kooterke
 (エ) クニ エエランペウテッ ノ
 kuni e=erampewtek no
 アイヌ ポン メノコ エウン (ノ エッ)
 aynu pon menoko eun
 エアラパ ルスイ ヒ(ア)エコン ルスイ ヒ
 e=arpa rusuy hi e=kor rusuy hi
 アヌカラ クス アエラムオカ ヒ
 a=nukar kusu a=eramuoka hi
 エエランペウテッ (ル)ルウェ ネ ヤ
 e=erampewtek ruwe ne ya
 ウネノ イルワッ アネ ヒネ
 uneno irwak a=ne hine
 マッネ ヒネ エネ (エ)パクノ アン ペ
 mak ne hine ene pakno an pe
 (エ)エエランペウテッ ヒ アン」
 e=erampewtek hi an”
 セコロ アイェ コロ
 sekor a=ye kor
 アコパシロタ ア アコパシロタ ア
 a=kopasrota a a=kopasrota a
 カムイコイパッ エトコ タ
 ”kamuykoypak³³ etoko ta
 アイェ クス ネ ナ」 セコロ アイェ コロ
 a=ye kusu ne na” sekor a=ye kor
 アコパシロタ ア アコパシロタ ア
 a=kopasrota a a=kopasrota a
 「テワノ カ スイ ネ アイヌ オルン
 “te wano ka suy ne aynu or un
 イヨシッコテ クニ エラム ヤ
 iosikkote kuni e=ramu ya

もしかして、神のところに、
 知られたならば
 ジメジメした世界へお前が踏み落とされる
 だろうことをお前はわからないで
 人間の娘へ
 お前が行きたがったことや欲しがったことを
 私が見てわかっていたことを
 お前は知らなかったのか。
 同じ兄弟であって
 どうしてこれくらいのことが
 お前はわからないのか。」
 と私は言いながら
 叱り続けた。
 「神にとがめの前に
 私が言うのだぞ。」と言いながら
 何度も叱りつけた。
 「これからもまた、その人間に
 恋をするつもりでいるのか？

³³ 原稿は「カムイコオリパッ kamuykooripak」としていたが、モニターから過ちを指摘されて「カムイコイパッ kamuykoypak (神の咎め)」と修正した。

(ア)アッテイネ モシリ カムイ オルン
 ar teyne mosir kamuy or un
 アイェ ワ (アッ) アイコオテレケ³⁴ ヒ
 a=ye wa a=i=kooterke hi
 エキ ルスイ ヒ ネ ヤ
 e=ki rusuy hi ne ya
 (ア ポン メノコ) カムイ オルン
 kamuy or un
 テワノ (エ、オ) イヨシッコテ クニ
 te wano iyosikkote kuni
 エラム ソモキ ヤ」 セコロ
 e=ramu somo ki ya" sekor
 アイェ コロ アコパシロタ コロ オラ
 a=ye kor a=kopasrota kor ora
 エアシリ エラムアン ワ オラ (オラ、ア)
 easiri eramuan wa ora
 アコパシロタ ア アコパシロタ ア コロ
 a=kopasrota a a=kopasrota a kor(o)
 オラ (ン……) カムイ オッタ (も、だか)
 ora "kamuy or ta
 アイオベンパッ³⁵ ソモ キ ノ
 a=i=openpak somo ki no
 アイヌ オルン (テウ) イヨシッコテ
 aynu or un iyosikkote³⁶
 ソモ キ クス ネ ナ」 セコロ
 somo ki kusu ne na" sekor
 ハウエアン ワ (イ)イコオンカミ
 hawean wa i=koonkami
 ルウェ ネ セコロ アン ウウェペケレ
 ruwe ne sekor an uwepeker
 ウパシ チロンヌァ イソイタッって。
 upas cironnup isoytak TTE

ジメジメした世界 [に]、神へ
 私が言って、私たちが踏み落とされることを
 お前は望んでいるのか？
 神のところで
 これからは、恋をするべきと
 お前は思わないのか？」と
 私は言って叱るとそれから
 はじめて彼が理解して、
 私が叱り続けると
 それからは「神のところに
 私たちが見られないように
 人間に恋を
 しないつもりですよ。」と
 彼が言って、私に礼拝
 したという昔話を
 白キツネが話したんだとさ。

³⁴ 「アエコオテレケ a=e=kooterke (お前が踏み落とされる)」の可能性もあるが、音としては「アイコオテレケ」と聞こえるのでそれを記した。他の神に知られたら、兄弟共々に地下に踏み落とされると解釈した。

³⁵ 原稿は「アイオベンパッ a=e=openpak」としていたが、モニターから過ちを指摘されて「アイオベンパッ a=i=openpak」と修正した。

³⁶ 人称接辞「アン =an」の脱落か。

3. 日本語テキスト

あるとこに、あの、兄弟で、で、二人暮し、してて
なんの〔苦勞する〕生活もしないで、暮らしているうちに
自分らの家の下の方にも、女の子兄弟³⁷二人いたの見ていても
自分らも、わー、行き来もしないでいるうちに兄貴、
自分の兄貴の方がその、娘、二人いる娘の姉の方が好きで好きで
そこへ行って結婚しようと思う気持ちになっていたの自分、
弟ながら見ていたんだけど、もしもそういうことしたら
神さんに大変だっという気持ち持っていたのに
あるときに、行こうという支度していたから 先回りして、
自分こんど、犬になりかわって、犬になって、自分、行っただけ
その女の子ら二人、薪とりしてて、自分、犬の子っこだから
そばへ行ったら、すごい喜んで、遊ばしてもらったりなんかしてるうちに
薪とり終わって、そーっと下からその、背負ってる荷物の上さ
トンと跳んで、え、ま、薪の上に自分座っていたり
そのまま自分さ、負ぶって、その女の子らの家さ帰ったけど
帰ってからすぐ家の中さ入って、ま、入り口の横の方に
左側の方から、あの、犬だから丸くなって寝ているうちに
その自分の兄貴が後さ下がって来たら、来て、家の中さ入ったら、
肉やら魚、お土産にその女の子らのお土産に背負って来て、出したら
で、出したりなんかするところさ、初めて下がったもんだから
その女の子らさ、オンカミして、挨拶したり、なんかしてから
こんど、そのお土産出して、すごい喜んで、その女の子ら喜んで
すぐ煮炊きして、自分らも食べたり、自分も、にも食べらしてくれたりして
食べているうちに、もう寝る時間なったら、その姉娘が寝たけ
すぐそばさ、その自分の兄貴が行って、そばさ寝て
寝たと思ったらすぐ、その、姉娘にちょっかいかけてるの見たから
自分、こんどイヌだから、尻っぺたの肉、かじったんだって
そしたらその兄貴がびっくりして、飛び出て行ったのも
禪も置いて逃げて行って、だからこんど自分、先回りして行って
自分の家さ、いて、こう、しらっばくれていたら、
後さ、自分の後さ入って来たけ、禪もなく、入って来て、その考えて
「何、自分さ、自分より、以上に、その偉い神さんだか、か、
化け物だか、いるのかして自分にこうやって馬鹿にした」ちって、

³⁷ この「兄弟」は「姉妹」のこと。北海道では姉妹あるいは兄と妹の関係であっても「兄弟」と表現することがある。

もう肝焼けてその、「何を自分さこうやって、ちょしたのかな³⁸」って
 いう気持ちで寝て、それから寝て、もう何日も寝てていて、ばっかし、
 いていて、もう、諦めて、とうとう、それがわからないで寝ているうちに
 出て、まだ³⁹思い出して、やっぱりその娘に諦めなくて
 まだ行く支度してて、今日、行こうっていう気持ちになっていたから
 自分、先走りして行って、もうその女の子らの家の近間に
 フキの葉っぱで小屋こしらえて、フキの葉っぱで人間の形こしらえて、
 娘二人とそのフキの小屋とこしらえて、そこに隠れていたけ
 案の定、まだ兄貴が来て、のそばさ来て
 もし中さ入ったら、火つけたら大変だと思って⁴⁰
 そのフキの小屋さ、火つけたけ、フキの葉っぱ、乾いたのだから
 もうボンボン燃えてしまって、しまったの見たけ
 なおこんどもう、兄貴が肝焼けて、肝焼けて
 「何を自分さこうやって、いつもいつも、ちょしてるのかな」と思って
 肝焼けて、自分家さ戻って行ってからも、寝てばっかしいて
 その、自分にちょしたものの、探しても探しても
 わからないうちにもう、何日もなんぼ月も寝てるうちに
 もうすっかり骨ばっかりなって、死ぬばっかりなつたから
 もしや、死んでからだったら神さんにも申し訳ない
 自分ら、キツネの神さんだのに申し訳ないと思って
 それから初めて言って、悪く言って、
 「人間は人間に好きに、あの一、好き、好きになるんだし
 キツネはキツネにお互いにキツネ同士で好きになる
 人間は人間にお互いに好き好きになるもんだもの
 その、キツネのくせに人間さ、好きになって
 もしやこれを神さんで覚えられたら
 とんでもないことになるんでないか」って、
 もう、怒りつけて怒りつけて、初めて気づいて、
 「兄弟といいながら、自分、どうしてそんな馬鹿なんだ」って
 「自分は弟であって、そうやってるのに、兄貴のくせに
 ちょされたものがわからないっていう話あるか」ちって
 悪く言っていて、初めて「これからもう、そういう悪さしないで、
 神さんだからやっぱりキツネはキツネ同士、に好きになるから」って
 謝ったっていう、物語です。これがキツネの話。

³⁸ 北海道方言で「ちょしたのかな」は「からかったのかな」の意味。

³⁹ これ以降も「まだ」と聞こえる箇所があるが全て「又。再び」の意味である。

⁴⁰ 兄が家の中に入る前に弟が家に火を付けたということ。

〈参考文献〉

- ・大谷洋一「カムイからの意思伝達のあり方ー北海道アイヌの散文説話を中心にー」『口承文芸研究第三十七号』日本口承文芸学会 (2014)
- ・奥田統己編『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 (CD-ROMつき)』札幌学院大学人文学部 (1999)
- ・萱野茂『カムイユカッと昔話』小学館 (1988)
- ・萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂 (1996)
- ・楠本克子「資料報告 上田とし氏のウウェベケレ〜ウパッチロンヌアの兄弟の話」、『itahcara』創刊号編集事務局『itahcara (イタハチャラ)』第3号、『itahcara』創刊号編集事務局 (2004)
- ・久保寺逸彦『アイヌの文学』岩波書店 (1977年)
- ・久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店 (1977)
- ・田村すず子『アイヌ語音声資料2』早稲田大学語学教育研究所 (1985)
- ・田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館 (1996)
- ・知里真志保『アイヌ文學』元々社 (1955年)
- ・知里真志保『知里真志保著作集 別巻1 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社 (1976)
- ・萩中美枝『北の教養選書1 アイヌの文学ユーカラへの招待』北海道出版企画センター (1980)
- ・中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』草風館 (1995)
- ・中川裕『アイヌの物語世界』平凡社 (1997)
- ・北海道教育庁生涯学習部文化課編『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書 (久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)』北海道文化財保護協会 (1992)